

使徒の働き26章 「ほとんどキリスト者になっている」

1A 以前の生活 1-11

1B ユダヤ教に精通した者 1-3

2B 先祖たちの望み 4-8

3B 徹底的な迫害者 9-11

2A 天からの光 12-23

1B 突き棒 12-18

2B 啓示への従順 19-23

3A わずかな言葉 24-32

1B 私のようになる願い 24-29

2B 無罪の判断 30-32

本文

使徒の働き 26 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、使徒 25 章まで来ました。先週は、26 章 18 節にある、イエス様がパウロに語られた言葉に注目しましたが、今朝は 26 章全体を一節ずつ見ていきたいと思います。

パウロは、カイサリアの監獄にもう二年以上過ごしています。けれども、新任の総督フェストゥスの前で、カエサルに上訴しました。それで、ローマにパウロを送り出さないといけないのですが、フェストゥス自身は、パウロが罪に当たることをしていないと分かっていました。それで問題は、訴えるべき事柄がないのに、カエサルのところに送ることです。パウロの主張している内容は、ユダヤ人の宗教のことについてであり、死んだイエスが今も生きているということでした。それで、ユダヤ教徒でありながら、ユダヤ人を治めている領主、ヘロデ・アグリッパ二世に彼の弁明を聞いてもらおうということになりました。

パウロにとっては、これは絶好の、証しをする機会です。自分の抱いている希望について、まっすぐに語ることのできる機会です。イエス様がかつて、「ルカ 21:12-13・・・わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出します。それは、あなたがたにとって証しをする機会ともなります。」パウロが生き生きと、自分に起こったことを証言していく姿は圧巻です。そして、最後にアグリッパに、「あなたは、もう少しで私をキリスト者にしようとしている。」とまで言わしめています。けれども実は、パウロ自身が、イエスについての圧倒的な証しで、自分自身も抗えなくなって、それで回心していたのです。パウロの回心を描く 9 章には出ていなかった、イエス様の言葉も読むことができます。

1A 以前の生活 1-11

1B ユダヤ教に精通した者 1-3

¹ アグリッパはパウロに向かって、「自分のことを話してよろしい」と言った。そこでパウロは、手を差し出して弁明し始めた。²「アグリッパ王よ。私がユダヤ人たちに訴えられているすべてのことについて、今日、王様の前で弁明できることを幸いに思います。³ 特に、王様はユダヤ人の慣習や問題に精通しておられます。ですから、どうか忍耐をもって、私の申し上げることをお聞きくださるよう、お願いいたします。

弁明は、それを聞く裁判官に対する敬意の言葉から始まります。彼が、「ユダヤ人の慣習や問題に精通しておられます。」とパウロは言っていますが、これは間違っています。当時、アグリッパ二世の治世の時、ユダヤ人にとっては避難場所のようになっていました。

2B 先祖たちの望み 4-8

⁴ さて、初めから同胞の間で、またエルサレムで過ごしてきた、私の若いころからの生き方は、すべてのユダヤ人が知っています。⁵ 彼らは以前から私を知っているので、証言しようと思えばできますが、私は、私たちの宗教の中で最も厳格な派にしたがって、パリサイ人として生活してきました。

パウロは、以前の生活から語り始めています。エルサレムにいるユダヤ人たち、彼を訴えている者たち自身が、実はパウロのことを良く知っていました。パウロは、ガマリエルの下で教育を受けていた、パリサイ派でありました。そして、このパリサイ派としての望みが、そのまま、パウロの宣べ伝えているイエスの御名につながっているのです。

私たちは福音書を読む時に、イエス様とパリサイ派の言い争いを見ると、パリサイ派がいかに主の教えから遠く離れているかのように思います。それは間違いで、むしろ近いからこそ、彼らがイエス様の教えに強く反発していたのです。遠く離れていたら気にする必要がないのです。律法を熱心に守ろうとしていたから、律法の精髓についてイエス様が語られたことが、自分たちが誤った解釈をしていることに気づいたり、自分たちがまるで律法にかなったことを行っていないことに気づき、それで猛烈に反発していました。近いからこそ、反発していたのです。

⁶ そして今、神が私たちの父祖たちに与えられた約束に望みを抱いているために、私はここに立って、さばかれています。⁷ 私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでいます。王よ。私はこの望みを抱いているために、ユダヤ人から訴えられているのです。

パウロは、自分が新しい宗教、新しい宗派を作って、新しい教えを言い広めているのではなく、まさに彼らが誇りとしている父祖たちが抱いていた望みを抱いていることを弁明しています。父祖

とは、アブラハム、イサク、ヤコブの族長です。彼らが望んでいたのは、メシアでした。アブラハムの子孫から、祝福が来ることを約束されていました。アブラハムは、愛する独り子イサクを献げるように命じられましたが、そこで彼は、イサクは生き返り、取り戻すことができると信じていたのです。そこに、メシアが死んでも生き返るといふ信仰があったのです。こうやって望んでいたのです。

そして、ヤコブから出て来た十二部族も、絶えず、夜も昼も神に仕えながら約束のものを得たいと望んでいました。イエス様がお生まれになって間もなくしてから、その約束がかなえられたことを知って、深い慰めを知った人々がわずかにいました。老齢になっていたシメオンが、神殿で仕えていました。「ルカ 2:25b この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルが慰められるのを待ち望んでいました。」とあります。そして、マリアに抱かれている幼子イエスを見て、この子を自分の腕に抱き、こう言いました。「2:29-32 主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。30 私の目があなたの御救いを見たからです。31 あなたが万民の前に備えられた救いを。32 異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光を。」

そして、まさにこの望みのゆえに、ユダヤ人たちから訴えられているという矛盾を、パウロはアグリッパに訴えているのです。彼らが熱心に待ち望んでいる方に対して、かえって迫害をしていました。イエス様は何度となく、ご自分が彼らのために使わされたのに、彼らが拒んだ矛盾を語られましたね。畑の収穫に、主人が息子を遣わしたら、農夫たちは殺してしまったという話。そして、家を建てる者たちが、その建物の要石を捨ててしまったという話。この矛盾です。

⁸ 神が死者をよみがえらせるということ、あなたがたは、なぜ信じがたいこととお考えになるのでしょうか。

これが、パリサイ派の人たち、聖書をそのまま信じ、目に見えない天使や、死者の復活を信じていたことなのです。その第一人者がイエスご自身であり、同時にこの方がメシアであることが明らかにされた、ということです。使徒ペテロは、聖霊が降ったその日に、集まってきたユダヤ人たちに、詩篇 16 篇を出しながら、そこがキリストの復活をダビデが予見していたのだと述べました。「2:27 あなたは、私のたましいをよみに捨て置かず、あなたにある敬虔な者に滅びをお見せにならないからです。」

3B 徹底的な迫害者 9-11

⁹ 実は私自身も、ナザレ人イエスの名に対して、徹底して反対すべきであると考えていました。

パウロは慎重に、イエス様の名に言及しています。この名を口にただけで、反発と反感が来るからです。初めに、父祖たち、十二部族たちが待ち望んでいた約束を前面に出し、そして、死者の復活を前面に語りました。そして、イエスの御名に言及しています。まず、自分自身が彼らと同じ、

この名に対して徹底して反対すべきだと考えていました。

¹⁰ そして、それをエルサレムで実行しました。祭司長たちから権限を受けた私は、多くの聖徒たちを牢に閉じ込め、彼らが殺されるときには賛成の票を投じました。¹¹ そして、すべての会堂で、何度も彼らに罰を科し、御名を汚すことばを無理やり言わせ、彼らに対する激しい怒りに燃えて、ついには国外の町々にまで彼らを迫害して行きました。

ここまで恐ろしい迫害をしたのは、パウロはこの時にすでに、イエスに真理があると分かっていたからです。分かっていたからこそ、それを良心の中で押し潰すために迫害に訴えました。迫害をする人たちは、自分たちに光が当てられているから迫害することが多いです。

2A 天からの光 12-23

1B 突き棒 12-18

¹² このような次第で、私は祭司長たちから権限と委任を受けてダマスコへ向かいましたが、¹³ その途中のこと、王様、真昼に私は天からの光を見ました。それは太陽よりも明るく輝いて、私と私に同行していた者たちの周りを照らしました。

聖書の中には、このような形で天からの啓示があります。ダニエルが、ティグリス川の岸にいた時に、イエスご自身ではないかと思われる使いの栄光の姿を見ました(10章)。エゼキエルは、ケバル川のほとりで、神々しいケルビムの幻を見て、その上に、人間の姿に似たものがあつたのを目撃しました(1章)。そして、思い出してください、ルカ2章は羊飼いたちが夜の番をしていた時、天からの大勢の御使いの軍勢を見ました、キリストが来られたことを告げたのです。ですから、このような形の天からの光は、まさしく神からのものであるとユダヤ人たちは受け止めるのです。

¹⁴ 私たちはみな地に倒れましたが、そのとき私は、ヘブル語で自分に語りかける声を聞きました。『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。とげの付いた棒を蹴るのは、あなたには痛い。』

パウロはここで「ヘブル語で」と言っていますね、ユダヤ人としてのイエス様が、ユダヤ人のパウロに語りかけておられます。そして、親愛を込めた呼びかけです、「サウロ、サウロ」と二度呼びかけるのは、主が、サムエルが召された時、またマルタにイエス様が語られる時もそうでした、個人的に親愛を込めて語りかける時に二度、呼びかけます。パウロは、キリストの弟子たちを迫害していましたが、それは彼らと一つになっておられるイエスを迫害していたのです。

そして、パウロのその時の状態を、「とげの付いた棒を蹴る」と言っています。イエスの真理について知りながら、いや知っているからこそ激しく迫害した、その時の状態を示しています。畑を耕すために、若い牛に頸木を負わせます。けれども、そのように頸木が負わされると、初めての時は突

っぱねようと、足蹴りをします。そこで、耕す人は、「突き棒」といって、先の尖った棒を付けておきます。牛が、頸木を嫌がって足蹴りをすると、突き棒に刺さって痛い思いをします。そうやって、頸木に逆らってはいけないことを学ぶのです。つまり、パウロは、イエスについての知識の頸木が負わされていたのです。この方がもしかしたらメシアかもしれないという知識が、彼の良心に入ってきています。それに抵抗して、自分自身を痛めているのだということです。キリストの弟子たちによって、自分に与えられた頸木が見えてきます。だから彼らを迫害するのですが、それは彼らを痛めつけているだけでなく、自分自身をも痛めつけているのです。

しばしば、反抗する人の中に、イエスを自分の救い主とする人々が起こされることがあります。反抗や反発をしているのは、まさに自分の良心にそのことが真理だと分かっているからです。それでイエスを主とするならば、その人は一途に主に従うわけです。そして、信仰を持った者たちも、信じる前から持っている自分の力があります。それを「肉」と呼びます。肉は神に反抗します。その肉を御霊によって断ち切って、主に与えられた頸木を負わないといけないのです。それに反抗すればするほど、自分自身を痛めつけてしまうことになるのです。そして、自分を明け渡す時、とても楽になります。イエス様は言われました、「マタ 11:29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。」主の頸木は軽いのです。

¹⁵ 私が『主よ、あなたはどなたですか』と言うと、主はこう言われました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。¹⁶ 起き上がって自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしを見たことや、わたしがあなたに示そうとしていることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。』

パウロは、初めにこの方が主であると知り、けれども名を尋ねると、それがイエスであったということです。そして、「起き上がって自分の足で立ちなさい。」とあります。これまで、肉体の足がなえている人たちに、使徒ペテロなどが、「イエスの名によって起き上がりなさい」と信仰によって語ると、その人は起き上がりましたが、同じように起き上がる必要があります。彼は自分のしていたことが間違っていたことを悔い改め、次に主に命じられることを行なうよう起き上がる必要がありました。

そうでなければ、彼は、自分が迫害していたイエスの御名を、すぐに証しすることはできなかったでしょう。これを回心と言います。回ると書きますね、日本語で。右に歩いていたところを、振り返って、左に歩き始めるのです。自分の今までの在り方を捨て、イエスにある道を歩むことです。

¹⁷ わたしは、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのところに遣わす。¹⁸ それは彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、こうしてわたしを信じる信仰によって、彼らが罪の赦しを得て、聖なるものとされた人々とともに相続にあずかるためである。』

このところを、先週、じっくりと学びました。パウロ自身が、靈的に盲目にされていました。闇の中に生きていました。サタンの支配の中に生きていました。けれども、天からの啓示によって、光に照らされました。そして、イエスを信じ、罪の赦しを得ました。そして、聖なる者とされ、神の御国にあずかるようにされ、そのことを人々に宣べ伝えなさいと命じられたのです。パウロは、十二弟子のように、三日目に墓からよみがえられたイエスには会いませんでしたが、このような形で復活の主が、ダマスコに行く途上で会ってくださったのです。

2B 啓示への従順 19-23

¹⁹ こういうわけで、アグリッパ王よ、私は天からの幻に背かず、²⁰ ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤ地方全体に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えてきました。

パウロのしていたことは、「天からの幻に背か」ないことでした。このことに従順であることでした。パウロは、ガラテヤ書で、同じことを証言していますが、自分はユダヤ教に進んでいて、先祖からの伝承に人一倍熱心だったけれども、「1:16 異邦人の間に御子の福音を伝えるため、御子を私のうちに啓示することを良しとされた」と言っています。

そして、パウロは自分が忠実にその使命を果たしてきたことを説明しています。かなりの広範囲で、パウロについての噂は広まっていたのですが、それもそのはず、彼は、まずユダヤ人に対して、悔い改めて神に立ち返ることを伝えました。ダマスコに行ってから、エルサレムに行って宣べ伝え、ユダヤ全体にも伝えました。それから使徒 13 章以降にあるように、アンティオキアの教会から遣わされて異邦人にも宣べ伝えてきました。そして、パウロは、イエス様の命令を意識して話していると思います。「使 1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」エルサレム、ユダヤ地方、それから地の果て、すなわち異邦人です。

ここでパウロが、「悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするように」と言っていることに注目してください。悔い改めることを宣べ伝えるように、イエス様は復活後、弟子たちに命じられていました。「ルカ 24:47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」そして、悔い改めというのは一回限りではなく、それにふさわしい行いをするということが大事ですね。バプテスマのヨハネも、バプテスマを受けに集まってきた者たちに、「ルカ 3:8 悔い改めにふさわしい実を結びなさい。」と説きました。悔い改め、神に立ち返った後、その後の生活が、その悔い改めを反映したものになっている、ということが大事です。

²¹ そのために、ユダヤ人たちは私を宮の中で捕らえ、殺そうとしたのです。

ここで、はっきりと捕らえられ、殺されそうになった理由をパウロ側で結論付けています。ローマ法に触れるような、騒動や宮を汚したということではなく、真っ当に神への悔い改めを説いていたことが、問題になったということです。

イエス様はこのことを前もって弟子たちに語っておられました。何か、真っ当な理由があつて迫害するのではなく、彼らが、イエス様のことばに聞き従わなかったから、また神を知らないから、弟子たちを迫害することを前もって告げておられました。「ヨハ 15:20-21 しもべは主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたも迫害します。彼らがわたしのことばを守ったのであれば、あなたがたのことばも守ります。21 しかし彼らは、これらのことをすべて、わたしの名のゆえにあなたがたに対して行います。わたしを遣わされた方を知らないからです。」反発し、反抗する時に、あらゆる告発をするのですが、実は自分たちがイエスの言葉に従えていない、悔い改めていないことが問題なのです。そのために、理不尽な、故のない憎しみを抱きます。

^{22a} このようにして、私は今日に至るまで神の助けを受けながら、堅く立って、小さい者にも大きい者にも証しをしています。

自分がこれまで、堅実に証しをしてきたことを弁明しています。堅く立つことができたのは、神の助けがあったからだ。そして、「小さい者にも大きい者にも」というのは、どんな人にも、ということです。影響力の小さい人に対しても、大きい人に対しても、ということです。人によっては、目立つようなことだけを行って、人目につかないことはやらない、ということがあるでしょう。けれども、パウロはそうではありませんでした。今、アグリッパに証ししていますが、彼は、ピリピにおいては、会堂もなかったその町で、川岸に集まった、僅かな人数の女性たちに語ったのです。

^{22b} そして、話してきたことは、預言者たちやモーセが後に起こるはずだと語ったことにほかなりません。²³ すなわち、キリストが苦しみを受けること、また、死者の中から最初に復活し、この民にも異邦人にも光を宣べ伝えることになると話したのです。」

パウロは再び強調しています。話して来たことは、ユダヤ人たちの宗教に反することではなく、まさに預言者たちやモーセが起こるはずだと語ったことに他なりません。それが、キリストが苦しみを受け、そして死者の中から最初に復活すること。それから、異邦人にも光を宣べ伝えることも、預言者たちが語ったことです。イエス様ご自身が復活された後に、弟子たちにこのことを語られていました。(ルカ 24:44-47)

3A わずかな言葉 24-32

1B 私のように願う 24-29

²⁴ パウロがこのように弁明していると、フェストゥスが大声で言った。「パウロよ、おまえは頭がおかしくなっている。博学がおまえを狂わせている。」

フェストゥスは、こんなことを聞くのは初めてでした。パウロは、それぞれの人の聞く力に応じて弁明していますから、異教徒であり、ユダヤ教のことについてはほとんど知らないフェストゥスには、このようなことを話していなかったのです。一般のローマ人は、体の復活は信じていませんでした。ローマの宗教にそのような信仰はなかったからです。ギリシアの宗教もそうですね、だからアテネでパウロが語った時も、死者の復活について彼が語ると、あざけて、軽くあしらったのです。けれども、パウロが論理立てて、知識をもって語っていることだけは分かり、それで「博学がおまえを狂わせている。」と言わせました。

日本も、似たような感じですね。日本では、人が死ぬことを認めません。霊がそのまま残り、時に私たちのところに戻ってくると信じています。本当の意味で死ぬということを認めない死生観になっています。しかし、福音は、人は必ず死に、それは罪から来ることを教えています。死とは肉体だけでなく、霊魂も同じであり、死後に神に裁かれて、永遠の死を味わうことを教えています。しかし、キリストが肉体において死なれ、また神から引き離されたことによって、私たちの身代わりになりました。そして、死に至るまで忠実であったので、神はこの方を死者の中からよみがえらせ、天に引き上げられて、あらゆる権威にまさる権威、あらゆる名にまさる名をお与えになったのです。人は死ぬが、キリストにあって復活するという希望があるのです。このことを話し、本当に言っていることが分かったならば、多くの人が確かに、「あなたは頭がおかしくなっている」と言うことでしょう。

²⁵ パウロは言った。「フェストゥス閣下、私は頭がおかしくはありません。私は、真実で理にかなったことばを話しています。^{26a} 王様はこれらのことをよくご存じですので、その王様に対して私は率直に申し上げているのです。」

そうです、パウロは、天からの啓示というのは空想話ではなく真実になかったことを語り、また、モーセの律法と預言者の語っていたことを宣べ伝えているにしかすぎないという、理にかなったことを話しています。

^{26b} このことは片隅で起こった出来事ではありませんから、そのうちの一つでも、王様がお気づきにならなかったことはない、と確信しています。²⁷ アグリッパ王よ、王様は預言者たちを信じておられますか。信じておられることと思います。」

フェストゥスから、再びアグリッパにパウロは語りかけています。ここでは、もはや弁明ではありません

せん、説得であり、信仰に至るための勧めであります。「片隅で起こった出来事ではありません」と言っていますが、イエスが十字架につけられ、また復活のうわさが一気に広まっていることは、ユダヤ人の中では話題になっていたことでした。そして、弟子たちが至る所でこのことを言い広めていますから、ユダヤ人と多く接しているアグリッパなら耳に入らなかったことはないでしょう、と言っています。

それから、預言者たちを信じておられると思いますと促しているんですね。預言者たちを信じているなら、キリストを信じ、パウロの語っていることを信じるはずです。そして、信じていないといったら、ユダヤ教徒の風上にも置けない人物、ということになってしまいます。そこで、アグリッパに次の言葉を言わしめます。

²⁸ するとアグリッパはパウロに、「おまえは、わずかな時間で私を説き伏せて、キリスト者にしようとしている」と言った。

ここの「わずかな時間で」とは、「わずかなことばで」と訳すこともできます。どちらの意味も含まれているかもしれませんが、わずかな時間で、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている、と言ったのです。アグリッパは、そこまで説得されていました。パウロはかつて、突き棒に自分の足をかけて、自分を痛みつけていました。それで自分を主イエスに明け渡しました。今、アグリッパが自分の良心に、光が当てられています。あまりにも理にかなっている。また真実な話だと。私たち一人一人に、天からの啓示とまでいかなくとも、神の御霊による示しがあります。自分に与えられた良心に従い、悔い改めて、神の方向に行く必要があります。

²⁹ しかし、パウロはこう答えた。「わずかな時間であろうと長い時間であろうと、私が神に願っているのは、あなたばかりでなく今日私の話を聞いておられる方々が、この鎖は別として、みな私のようになったださることです。」

パウロは、ユーモアたっぷりに話しています。そのまま、アグリッパの疑いを認めています。彼がキリスト者になるために、説き伏せようとしていたのです。ここで日本語ですと、「この鎖は別として、みな私のようになったださることです。」となっていますが、ギリシア語では、「みな私のようになったださることです、この鎖は別としてね！」と言う感じです。ちょっと、話しながら微笑んでいたかもしれません。

2B 無罪の判断 30-32

³⁰ 王と総督とベルニケ、および同席の人々は立ち上がった。³¹ 彼らは退場してから話し合った。「あの人は、死や投獄に値することは何もしていない。」³² また、アグリッパはフェストゥスに、「あの人は、もしカエサルに上訴していなかったら、釈放してもらえたであろうに」と言った。

やはりすべての人が、パウロが罪を犯していないと判断しました。アグリッパに至っては、フェストゥスに、「もしカエサルに上訴していなかったら、釈放してもらえたであろうに」とまで言っています。これでフェストゥスは困った！ 訴状になるような内容がないまま、カエサルのところにパウロを送らなければいけません。

ここで結局、パウロがアグリッパに対する証しの機会になっただけです。聖霊が行ってくださった御業です。イエス様は、前もって弟子たちに語っておられました。「ルカ 12:11-12 また、人々があなたがたを、会堂や役人たち、権力者たちのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しなくてよいのです。12 言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」いつでも、どこでも、みなさんも弁明する用意ができていますように。聖霊が必ず助けてくださいます。そして、どうか自分の良心に語りかけられていることには、従順でありますように。自分自身を痛めて、反抗することがありませんように。